

小児科だより vol.16

卵アレルギーとインフルエンザワクチン

2017.12.1 発行

こんにちは。早いもので、2017年も残すところあとひと月となりました。今年は御前崎周辺では、10月中旬からインフルエンザBの流行を認めましたが、現在は落ち着いてきており、今後の本格的流行期前に必要な方は予防接種を打つようにしましょう。

それでは、今月の小児科だよりは、この時期に患者さんからよく質問を受ける、『卵アレルギーとインフルエンザワクチン』についてです。

現在、予防接種で鶏卵アレルギーが問題となるのは、インフルエンザワクチンと黄熱ワクチンのみとされています。インフルエンザワクチンの場合、アメリカ製

では、製造メーカーやロット間での差はあるものの、26~330ng/mlの卵白アルブミンが混入しています。一方、日本製のワクチンに混入する卵白アルブミンは数ng/ml以下と報告されています。

日本製のワクチンに含まれる程度の微量の卵白アルブミンで、全身性アレルギー反応を引き起こす可能性は低いと考えられますが、鶏卵の摂取によって過去に重篤な即時型反応（アナフィラキシー症状）を来したことのあるお子さんや、血液検査での卵白IgE-RASTでクラス5以上の場合には注意が必要になります。

このようなお子さんがインフルエンザワクチン接種を希望される場合、皮内反応を行うことがあります。一般的な予防接種は皮膚の下、つまり皮下に接種しますが、皮内反応とは皮膚の中に10倍に希釈したワクチン液をごく少量（0.02ml）打って、その15分後の反応を見るものです。その反応によってワクチン接種の可否を判断しますが、比較対照として生理食塩水を皮内注射する必要があり、結果として注射の回数が増えてしまうため、その適応についてはご両親と相談して判断させていただいています。

なおアレルギーの血液検査を行ったことのないお子さんの場合、一般的には鶏卵の二次製品（鶏卵を成分に含んでいる製品）が摂取可能であれば、皮内反応は必要ないと考えます。また、鶏卵や鶏卵の二次製品を未摂取のお子さんでは、離乳食がまだあまり進んでいない低年齢の乳児に対するインフルエンザワクチン接種の必要性などを、天秤にかけて考えていく必要があります。心配な方は、小児科外来へご相談下さい。

